

家なら、病人でも「母」「妻」「娘」でいられる

家なら、病人でも「母」「妻」「娘」でいられる

ところで、秋山さんはもともとは、産婦人科専門の看護師だった。なぜ、「がん」や「家での暮らしを支えること」に携わるようになったのかというと、きっかけは、2つ年上のお姉さんを41歳という若さでがんで亡くしたことだった。

お姉さんが40歳のときに転移性の肝臓がんが見つかり、家族は「余命1カ月」と告げられた。がんが広がっているために手術で取り切るのは難しく、肝臓自体の機能が落ちているため薬も使えない。当時、京都に住んでいた秋山さんは、お姉さん一家が住む神奈川に行き、病院でそう説明を受けた。

「病院にいてもベッドの上に寝ているだけならば、住み慣れたところで最後の時間を過ごした方がいい」。そう考えた秋山さんは、戸惑う本人に「ゆっくり生活を整えるのが大事だから」と説明し、思い切って家に連れて帰ったという。



今から25年ほど前のことで、在宅医療も訪問看護もほとんどない時代だ。それでも、「家」を選んだのは、医療者だからこそ当時の抗がん剤治療の辛さを知っていたことと、「病院と家では、時間の濃さがまったく違う」と考えたからだった。

「病院では面会時間が限られますし、周りに気を遣いながら話さなければいけません。でも家であれば、寝ている病人でも母親や妻としての役割を果たせるのです。小学生と中学生だった子どもたちに『行ってらっしゃい』『お帰りなさい』と声をかけることも、学校での出来事を聞くこともできます。それまでは家事なんてしたことのない義兄には、姉はベッドの上から『洗濯物はパンパンと広げてから干してね』などと家事のやり方を教えていました」

また、秋田から手伝いに来てくれた母親とお姉さんが濃い時間を持てたのも、やはり家にいたからこそ。がんという病名は伝えていなかったにも関わらず、「ただ事ではない」と察して神奈川まで出てきたお母さんは、「何か言い残しておくことはない?」「頭がしっかりしているうちに言っておいたほうがいいよ」と、お姉さんに話していたという。

「姉は、『死んでいくのは悔しいな。でも、その都度思ったことはたくさん言ってきたから言い残すことはない』と母に語っていました。姉にもがんという病名は伝えていみせんでしたが、自分の病気の重さはよくわかっていたのだと思います。そんな時間を持てたのも、やっぱり家にいたからでしょう」

がんが見つかった時には「余命1カ月」と告げられたお姉さんは、それから4カ月ほど家族との時間を過ごし、最後の2週間だけ病院のお世話になって人生を閉じた。

- 印刷
- PDF

Source URL: <https://www.novartis.com/jp-ja/home-even-sick-person-can-mother-wife-daughter>

List of links present in page

- <https://www.novartis.com/jp-ja/jp-ja/home-even-sick-person-can-mother-wife-daughter>
- <https://www.novartis.com/jp-ja/jp-ja/node/13996/printable/print>
- <https://www.novartis.com/jp-ja/jp-ja/node/13996/printable/pdf>